
幻の欠片

小沢望朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻の欠片

【Nコード】

N3264BA

【作者名】

小沢望朱

【あらすじ】

学校からの帰り。

友人の上宮征志は突然立ち止まり、銀杏の木の上に男がいると言い出した。

1（前書き）

人の生死を扱っています。ご注意ください。
イラストは、後から追加する場合があります。

> i 3 8 8 4 5 — 4 8 1 0 <

ほんと。正直に言う。鎬木僚紘^{かぶらぎともひろ}、十七歳。俺は今までのなんの変哲^{へんてつ}もない、そう、平凡な人生を歩んできたんだ。なのに、なんで。なぜこの俺が、今さら幽霊だのオバケだのと頻繁^{ひんぱん}に遭遇しないといけないんだ！

こういう状況でなければ、キレイだなと思うだろう黄色い銀杏^{いちょう}の枝葉を見上げて、俺は拳^{こぶし}を振り上げたい衝動にかられた。

「ブツブツとうるさいぞ、鎬木。どうした？ 腹でも減ったか？」

俺の怒りの原因をいつも作ってくれる、右隣に立つ男をジロリと睨む。

「お前こそ、今度はなんだよ？ 落ち武者か？ 犬か？ 猫か？ それとも、恨みがましい女の幽霊でもいるのか？」

俺はうんざりしながら、先程から道端の銀杏の樹をじっと見上げる友人に声をかけた。

上宮征志^{かみみやませいじ}。前世で陰陽師^{おんみょうじ}をしていたというこいつは、その能力が今でも備わってるらしく、こいつにその気がなくても幽霊だのオバケだのが勝手に集まってきては、助けを求めてくる。俺も、その能力のお陰で一度、命を救われた事があった。

征志と知り合ってから、それまで縁のなかった俺までもが、それを体験するはめになっていた。

しかし俺の場合、その幽霊が視^みえる時と視えない時があつて、今も、眉間に皺^{しわ}を寄せた征志が何かを視ているのは判るが、そのモノ自体は俺には視えなかった。

「ん？ あれ。お前には視えないのか？」

夕焼けに照らされ、オレンジ色へと染まっていく枝を指差して、征志は不思議そうに言った。

「視えてたらわざわざ聞くかよ。俺はお前と違って、全然、視たくもねえんだから」

肩を竦めて言う俺を見ながら、眉間の皺を深くした征志は、手を口元へと持っていていった。

「ふん。ヘンだな。なんでだろ」

俺の顔を見つめたままで、首を傾げる。そしてゆっくりと、視線を銀杏の枝へと戻した。

「あいつ。俺を威嚇してんだよなあ。原因は、お前だと思ったのに……」

「はあ？ なんじゃそりゃ。……それより征志。俺、早く帰りたいんだけど」

「今日も、あの人の所へ寄るのか？」

「ああ。もちろん」

俺の台詞に、征志の顔が微かに曇った。征志はいつも、『あの人』と呼ぶ。

俺達の……苦い記憶。

半年前。俺は大事な親友を、嫌な事故で亡くしていた。思い出しただけで、左の頬と腕の傷が疼く。

「おばさんの作る料理は、最高だからよ」

一人っ子だった孝亮の代わりに、毎日おばさんの手料理を食べる。きつとまだ食べたかっただろう孝亮の代わりに。そして、もっと孝亮に食べて欲しかっただろう、おばさんの為に。

「お前も一回、御馳走になってみれば？」

征志を見てニヤリと笑う俺に、片眉をヒョイと上げる。仕方ないというふうには短い溜め息を吐いて、征志は歩き出した。

「ま、いいか。直接害はなさそうだし……な」

言いながらも何かが引つかかるのか、おかしい顔をする。

「なんだよ、変な力才して。やつかいな奴なのか？ まさかまた……鬼、とか？」

「ん。いや、彼は人間だよ。でも……なんか……」

「ああ、とりあえず。オバケが男だってコトだけは解った」

等閑に頷く。その横で、征志が突然立ち止まった。俺の両肩を掴んでジッと顔を覗き込みながら、ゆっくりと目を細めていく。

「……ちよっ……」

こいつがこの目をする時はヤバい。これは、何かを探ろうとしてる目だ。その上、その対象が俺だなんて、まったく、ジョーダンじやねえ。

「な、なんだよ。カンベンしてくれよ。俺、関係ねえだろッ」

両手で征志を押しやって、未練がましく上目使いで俺を見る征志を睨み返す。

「お前ねえ！ 頼むよ、俺が怖がりなの知ってたんだろ！ 銀杏の樹の奴とは関わり合いも関わる気もないの！ わかった？」

手を振り上げて喚く俺をポカンと見つめた征志は、その後ブツと吹き出して身をよじるように笑いだした。

「ったく！ 俺、時々お前の友達やめたくなるよ」

笑う征志を尻目に、歩き出す。

俺は普通の高校生活を送りたいんだぞ。何が悲しくて学校帰りに幽霊見つけて、そいつの世話をしてやんなきゃなんないんだ。

「……なんで、まだ友達やってんだろな？」

追いついた征志が、身を乗り出すようにして俺の顔を覗き込む。

「知るかつ！ この幽霊おたくのどこがいいんだか……」

肩を竦めて、溜め息混じりに言ってる。それでも征志は、おもしろそうにクスクスと笑った。

「しっかしそうは言っても、俺が視^みた限りでは、あいつはお前を狙ってたんだよなあ……」

征志は鞆を頭の後ろで持つと、チラリと俺に目を向けた。

「お前最近、何か変わった事ないか？」

「変わったこと？」

「そう。例えば……」

人差し指を立てた征志は、それを尖らした唇へと持っていた。

「例えばだな」

「ああ、そういや最近。えらくねむい」

ポンツと手を打って言う俺に、カクリと征志がうなだれる。

「はあ？ それはいつもの事だろ？ じゃなくて、最近知らない奴なんだけど、時間に関係なく同じ場所でいつも会う奴がいるとか」

「全然」

「変な夢を見るとか」

「まったく」

ブンブンと首を振る俺に、片眉を上げる。

「ほんとに？」

疑われてもどうしようもない。視えもしない幽霊に憑かれる心当たりもないし、最近変わった事なんて、なんにも……。

ん？ いや。そう言えばあったかな？ 昨日。

俺は考えながら、ポリポリと頭をかいだ。

「あー、実は今朝。兄貴が変と言えば変な事を言ってた。俺はあいつが寝ぼけたんだと思ったんだけど」

「ほう」

征志が鋭い視線を俺へと流して、瞬きで先を促す。

「昨日の夜中、喉が渴いたとかで電気もつけずに台所にいたらしいんだ。そしたら二階から階段を下りてくる俺の足音がして、玄関が閉まる音がしたって言うんだ。で、てっきり俺が夜中にこっそり外に行ったと思って、玄関を見たら鍵はかかっているし俺の靴もある。まさかと思って俺の部屋を覗いたら、俺はちゃんとベッドで寝てたって言うんだ。ま、当たり前だけど」

俺の話を聞いていた征志の目が、驚きにゆっくりと見開かれていく。不意に立ち止まった征志は、俺から視線を外して、まっすぐと前を睨むように見据えた。

「なるほどね。…… 楠木、お前悪い夢を見ない代わりに、良い夢も見ないだろ？ と言うよりは。最近、夢見た事あるか？」

「夢…… ねえ……？」

腕を組んで考え込んだ俺は、唸りながら首を傾げた。

そっぴゃ、最近夢なんて見てないかも。でも、夢も見ずにグッスリと寝てるわりには、寝起きが悪いんだよなあ。

朝起きてもすつきりしない。寝ていたはずなのに、疲れも、眠気さえもが取れていないのだ。

最後に夢を見たのは、いつだったか……？

「見てない、ようだな？」

低く言った征志に視線を向けて、小さく頷く。うなずく大仰に溜め息を吐いた征志は、右手で頭を抱え込んだ。

「ったく！ 手の込んだ事じゃがって」

チツと舌打ちして、睨むように俺を見る。

「大体、お前は昔っから……」

「むかし？」

「いや、いい。こつちの話だ」

征志は面倒くさそうに手を振って、押し黙ってしまった。

こういう時は、さわらない方がいいんだ。そうすりゃ、タタリだつてないんだから……。

って、こいつは神様かよ！

心の中で突っ込みながら笑った俺に、征志が冷たい視線を向ける。それでも、いつものような文句を言うつもりはないらしく、すぐに視線を逸らした。

結局、孝亮の家の前に着くまで、征志は一言もしゃべらなかった。

「じゃあな」

俺の声も耳に入らないらしく、しばらく歩いてから、征志はぼんやりと振り返った。

「…あ？ ああ、…悪い。じゃあ……今夜な」

自室のドアを開け、壁に凭^{もた}れかかるようにして灯りのスイッチを押す。

闇は嫌いだ……。何かに掴^{つか}まらないと、取り込まれそうになる。何に取り込まれるというのか、何故こんなにも怯^{おび}えているのか、自分でもまったく解らない。

壁にピンで無造作に貼った、孝亮と二人で撮った写真に目を向けて、俺は口許をゆるめた。

あいつがいたら、笑い飛ばされるだろう。いや。あいつさえいれば、闇だって怖くはないだろうか。

「よつと」

俺はバスタオルを床に放って、濡れた髪のままベッドへと飛び込んだ。

『じゃあ……今夜な』

不意に、征志の言葉を思い出す。そう言い放った征志は、訊き返す俺を振り返りもせず、ヒラヒラと手を振って行ってしまったのだ。「言い間違い、だよなあ……？」

どうもそうでないような気もするが、夜の十時を過ぎたこの時間に、征志が訪ねて来るとも思えなかった。

「まあ……いつ……かあ……」

そんな事より、ひどく眠い。

心なしか、体が熱っぽい気もする。手の甲を額に乗せて、静かに目を閉じた。

沈み込んでゆくような感覚。音もなく、闇に包まれた『視界』が廻^{まわ}る。

「いま……行くから……」

無意識に呟いた台詞が、声となって出たのか、それとも心の中だ

けで呟いた言葉だったのか……。

その意味すらも解らぬまま、俺は、どっぷりと闇に浸っていった。

「とも……ひろ」

声が……。意識が……。強い言葉が俺を揺さぶる。

『ともひろ』

どこか不安げで、それでいて力に満ちた強い意志。この強い魂を、俺は知っている。懐かしい、遠い……。遠い……。記憶。

「嫡木！」

聞き慣れた声に、俺はハッと意識を戻した。

ガツと強引に見開いた目に映ったモノ。それは、俺の腕を掴む見知らぬ同年代の男と、そいつをこれ以上なくくらいに睨みあげる、征志の姿だった。

「……あ？」

間拔けな声をあげた俺を、二人が同時に振り返る。

その二人の向こうに見える景色に、俺はさらに情けない声を出した。今の今まで家の、それも自分の部屋にいたはずなのに、ここは。

……あの、例の銀杏の樹の下？

そこに俺は、薄いＴシャツに短パンのまま、裸足で立っているのだ。

「僚紘！」

「嫡木！」

二人が同時に叫ぶ。その二人を交互に何度も見た後、俺は見知らぬ男の方で視線を止めた。

男が、ぎこちなく俺に笑いかける。

「……あんだ。……誰だ？」

俺の言葉に頬を引きつらせた男は、指が食い込むかと思う程、強く俺の両肩を掴んだ。

「うそだろお！ 僚紘ッ」

男の口から、悲鳴のような声が洩れる。膝の力が抜け、崩れそう

になる男の肘を、慌てて支えてやった。

イマイチ状況が呑み込めない。仕方なく、征志の方へと目を向ける。征志はキュツと唇を引き結び、哀れみのこもった目でジツと俺の腕の中で震える男を見据えていた。

「鎬木。そいつは……」

「だまれえーッ！」

征志の言葉を、男の鋭い声^{さえぎ}が遮った。男は一瞬俺を見てから勢いよく振り返り、征志へと飛びかかる。

「お前が！ お前さえ、邪魔しなければッ！」

一瞬俺を見た瞳には、涙が浮かんでいた。俺を責めるでなく、それはただ絶望に彩^{いろど}られた、灰色の瞳。

「おい！ ちょっと！と！」

征志の胸倉を掴む男を、後ろから捕まえる。

「どうなつてんだよ」

俺の腕を剥^はがそうと暴れる男を抱えたまま、征志に声をかける。

「こいつは、昼間この銀杏の樹にいた奴だ」

「うるさいッ！ お前の所為^{せい}だ。僚紘は言ったんだ、俺と一緒に逝^いくつて！」

「えっ……？」

緩んだ俺の手に男が振り返り、グイッと俺の手首を引つ張った。

「僚紘。ほんとに俺を忘れたのか？」

縋^{すが}るような男の目が、必死に訴えかけてくる。

「何、言つて……」

見覚えもない男にそう言われても、俺は何も知らないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3264ba/>

幻の欠片

2012年1月13日19時58分発行